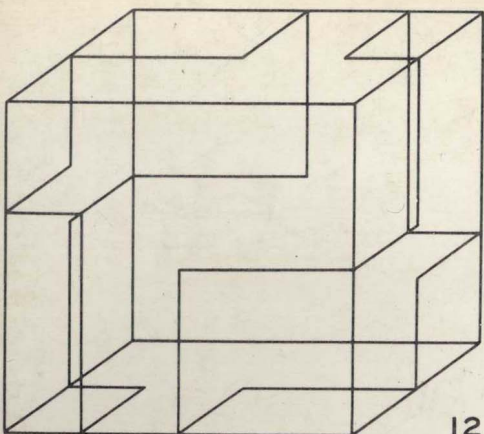
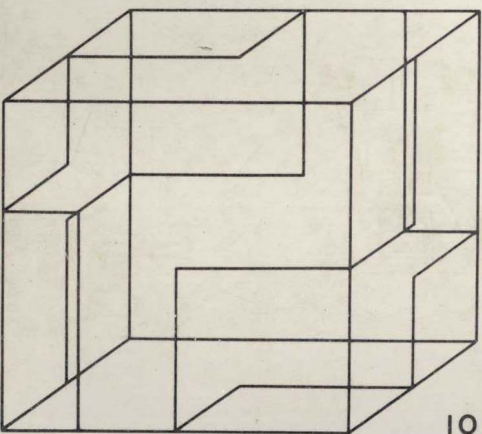
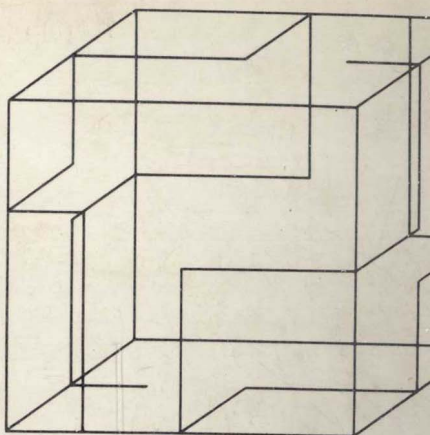


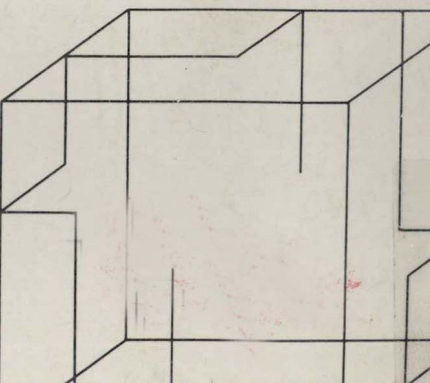
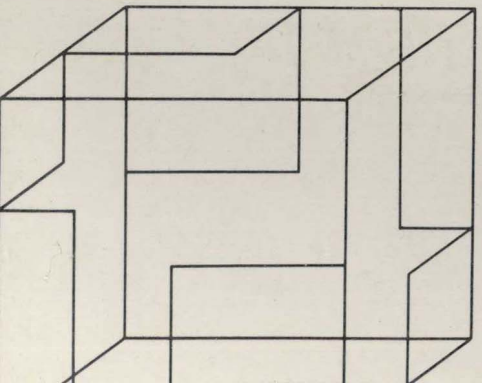
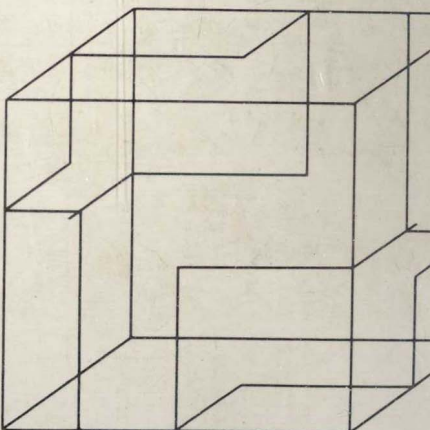
# メカニズムNo.1 黒井千次



12



10



メカニズム  
No. 1

■  
黒井千次

メカニズム No. 1

検印省略

1971年11月15日第一刷発行

定価680円

著者

黒井千次

発行者  
発行所

竹内静江  
三笠書房

東京都新宿区戸山町35  
電話東京(203)7781(代表)  
〒162 振替 東京 22096

印刷 日本製版 製本 端野製本

© Senji Kuroi Printed in Japan 1971

0093-001044-8936

乱丁・落丁は取替えます。

メカニズム  
No. 1

黒井千次



目次

メカニズム  
No. 1

7

冷たい工場

57

あとがき

251

装幀

石川勝

メ  
カ  
ニ  
ズ  
ム  
No.  
1





メ  
カ  
ニ  
ズ  
ム  
No.  
1



## 1

ガラス張りの螺旋階段は、広いロビイの熱帯性植物の鉢の横からゆったり立ちあがっていた。各段の縁に金張りの滑り止めをうちつけた階段は上に行くに従って次第に渦を縮めているために、下から見るとまるで天へ昇る階段のように見えた。ロビイをめぐって高まっていくその階段は、事実、アカサタナ馬車工業株式会社の従業員にとっては、文字通り天に昇る階段であると言えた。だからアイウエオがそのガラス張りの巾広い階段の一段目に足をかけた時、彼の足が小刻みにふるえていたからと言って、決して無理はなかったのである。

「ここを昇るのは、あんた始めてかね？」

すぐ脇を昇っていた企画室長がアイウエオの方に身をよせてきいた。

「はあ。」緊張に曲らなくなりそうな足で一段一段上っていたアイウエオは、かすれた低い声で答えた。今彼の足の下にある金で縁取られたガラスの階段は、彼にはあまりに豪華で、あまりに脆弱であるように思われた。一段一段、高くなればなる程、昇りなれない自分がこの階段を踏み

はずし踏みぬき、ロビイの床にその高みから垂直に叩きつけられはすまいか、という恐れが彼の足を一層硬直させた。

「昔からうちの会社ではこの階段を昇ったら課長が近いと言われてる。あんたは少し早いようだがまあその資格は十分にあるね。」企画室長はアイウエオがまとめた総合資料のはいっている黄色いファイルを目の前にヒラヒラさせながら珍しく少し湿った声で言った。

「はあ。」アイウエオは頭をあげるようにしながらやと答えた。三段上を黄色いファイルをきつちり脇にかかえた製造部長が、なれた足どりでツツツと昇っていく。その少し上を経理部長が重い身体をやや前かがみにして面倒くさそうに昇っている。一足毎に靴の下がカチカチとなるガラスの階段を、アイウエオはこわごわ踏みしめ続けた。

後一回りで階段が終ろうとする時になって、アイウエオはやつと足下のガラスを通して下を見ることが出来た。幾枚かの屈折したガラスごしに、熱帯性植物の濃い緑が遠く点のように見えた。その斜め左に受付の机がマツチ箱のように置かれている。アイウエオは、急に自分の立つ高さに気がついた。その高さは、ガラスの階段の上のアイウエオの身体を快くふくらませた。彼は残りの階段を、音たてて駆け上りたい衝動に襲われた。眼の前の金色の滑り止めが、彼の眼に一斉にまぶしい光を投げた。アイウエオは胸をはって最後の一段を踏んだ。——ガラス張りの階段の上には、社長室と重役会議室しかなかったのである。

重役会議室の窓からは、白く曇った空がすぐそこにあるように見えた。同じ角度で少しずつ開けられた回転窓からは、大気圏上層部の澄んだ空気がかすかに流れこんでいた。広い額の下で真

黒に光る眼をギロリと精力的に一回転させた専務は、競馬馬のようにひきしまった肉体をクッションのいい椅子の上でブルルとふるわせた。彼の張りのある声は純白の壁に叩まれた室内を直線的に切った。

「馬車工業界は今や未曾有の難局に直面しております。その最も大きな原因は、自動四輪車の出現であります。それは近代的設備による急速な立ち上りと量産による低コストを背景として、今や我々馬車工業の根幹をおびやかすものになるうとしてゐる。」専務は十数名の出席者に闘いを挑むようにグツと身をのりだした。アイウエオは企画室長の横で思わず椅子ごと身をずらせた。

「一方、馬車工業界内部の企業競争は最近とみに激化し、優位を誇る我が社に追いつかんものと益々ピッチをあげて迫って来ている。しかしながら需要を見れば、生活の総合的な安定を反映して次第に豪華なオーナー・ドライブつまり自家用の車を求める声が高まっている。馬の生産も十分余裕をもって先行している。この需要傾向に我々は機敏に対処しなければならぬ。今なら作れば売れる。この機を掴んで我々は自動四輪の出鼻をくじき、同業者の追撃を完封してしまわねばならぬ。」専務はたて髪をふるようにして顔をつきだした。「それには、設備の徹底的な合理化と生産性の極度の向上による画期的なコスト・ダウンによって一気に勝敗を決することが焦眉の急務なのであります。このような目的をもって本日の設備合理化生産性向上会議が開かれるという事を十分お含みの上、この会議を進めていただきたいと思ひます。」専務は払うように声をきると出席者をすばやく見まわして机から身を離れた。社長はせり出した腹を上からおさえつけるようにして組んだ両手をじっと見つめたまま、柔らかない首の肉の間に顎をうずめている。

「では技術部の方から。」専務は技術部長に黒い視線を突き射した。技術部長は細長い上体を椅子の上に直立させた。

「一言にして言うならば、本日技術部で提案致しますこの計画は、画期的な出力の強力ベルトコンベアの駆動を中心とする総合設備計画であります。まず機械の性能でありますが……」技術部長は、若いエンジニアで、アイウエオと同じように特に出席を命じられたカキケコを時々ふりかえりながら臆大な総合計画をダイナミックに組み立てていく。次の段階ではこの設備計画がすべて原価に換算され、集約されなければならない。技術部長とカキケコの軌跡を黄色いファイルの上で追いながら、アイウエオは机の後ろで無意識に身構えていた。

「したがいましてこの強力ベルトコンベアを中心とする総合計画によれば、一躍、現在の三一七%の生産をあげることが出来るというのが結論であります。」技術部長は説明を終ると、ほっとしたように椅子の上で背を丸めた。

「続けて企画室の方から。」専務は切り返すように企画室長にむきなおった。部屋の空気はゆるむ暇もなかった。

企画室長は油のきれた機械のよういきなり甲高い声をたてた。

「只今の技術部の案にもとづいて採算性を検討致しました結果は、利益率を現在の五〇%増の状態で維持するとして、約四五%のコスト・ダウンが可能になるというのが企画室の結論でございます。詳細な資料説明は担当のアイウエオが特に出席を命じられておりますのでそちらからいたさせます。」

アイウエオは回転窓から流れこむ蒸溜水のような空気を胸いっぱい吸いこんだ。専務の広い額が、砲塔のようにアイウエオの方に回転した。アイウエオはかすかにふるふる指で黄色いファイルの上の数字をおさえて説明を開始する。

「以上技術部提案の黄表紙案による設備資金合計はP億円であります。只今この強力ベルトコンベアシステムによる立上り生産台数をC表の通り想定すれば……」

静まりかえった部屋の中で、アイウエオの歯切れの良い声につれて十数名の出席者の黄色いファイルはヒラリヒラリと頁をかえす。アイウエオは自分の声が、つややかに光るマホガニ製の机の上をすべってあますことなくトップ・マネージャーの耳に吸いこまれていくのを快い興奮のうちを感じる。アイウエオの分析は材料費を検討し、作業時間を追求し、労務費を調査し、経費を明かにし、次第にこの黄表紙案による総合設備計画の経済的イメージを浮かびあがらせていく。ベルトコンベアの上のドラックス馬車は、その一つ一つのネジからボルトまで検討を加えられ、今四五%のコスト・ダウンという華麗な姿でマホガニ製の机の上にすべり出そうとする。アイウエオの説明につれ、馬車はキラリキラリとまだ知られなかった新しい面をきらめかせてますます豪華な、ますます完全なものとなっていく。馬車がそのつややかな机の上でゆるく一回転して全貌を余す所なく会議出席者の前に示した時、アイウエオの説明は静かに終わった。部屋の空気は十分に熱気をはらんだまま対流をおこして激しくわきかえった。

「説明は良くわかったがね。」社長の重い身体が椅子の底からゆっくり起き上った。「この案には今後二年間の計画しかのっていない。エケセテネ銀行への融資データにするには長期予想が必要



だ。」

「それは、資料、ありましたな。」企画室長があわててさびた釘のねじ切れる音をたてた。

「外部条件が変わるかもしれませんので、一応二年間の計画をたてたのですが、特別大きな条件の変化がないとすれば。」アイウエオは黒板の前に立つとグラフを書き始める。

「生産台数はここから八〇〇台ピッチで増加しますから、初期は設備の特別償却の問題もあって若干横ばいになりますが、製造損益はここから急激に上って、以下……」アイウエオは赤いチョークを握って右上へのびるカーヴを引きはじめる。赤いカーヴはアイウエオの臍のあたりから始まり、胸を通り、首をぬけ、頭の高さをこし、彼の爪先立ちした右手の限度をこえようとする。

「まだまだ、ここで十月ですから、ここからぐっと上って……」アイウエオがあきらめて赤いチョークを離そうとした時、チョークは黒板に強く吸いついたまま急激に斜め上に昇り始める。アイウエオの足は自然に床を離れ、赤いチョークに吊るされたまま上へ上へと黒板を昇っていく。黒板の上限がきれるとチョークは白い壁に移って昇り続ける。アイウエオは壁にさがったまま下の横軸を見おろして苦しい声で叫ぶ。

「ここで、十二月ですから、もっと、もっと、上ります！」

重役達の顔はアイウエオの指先の赤いチョークに吸いつけられて一斉に仰向いていく。赤いチョークはアイウエオをぶらさげたまま遂に天井に達する。チョークは天井にうつるとすこしうろろしたが、かすかな凹みをみつけるとためらわずにその凹みを頂上まで昇りつめた。アイウエオの身体は右手一本でユラユラと天井の赤いチョークから下った。チョークは凹みの内側を二、